



子どもの村東北

News Letter



紅葉シーズン、歩道に面したセンターハウスの裏庭はご近所さんとの憩いの場です。

第1回

おじゃまします。

初めて村を訪れた私と、村の人たち

柵や壁がないオープンな敷地で周囲とつながる、「子どもの村東北」にやってきました。迎えてくれたのは、スタッフの徳永さんと面川さん。どちらも朗らかな笑顔が印象的です。徳永さんの仕事は、育親（里親）の手助けをするファミリーアシスタント。家事の手伝い子どもの面倒など、家庭を力強くサポートしています。そして面川さんは問合せの窓口や事務を担当。「見学者の方に会う時は元気に対応するように心がけています」

と教えてくれました。育親と子どもたちの生活を支える2人。この村での印象的な出来事を聞いてみると、徳永さんからは「村を卒業した子がここに立ち寄ってくれた時に、自然と“おかえり!”という言葉が出たんです。この村が、自分から“おかえり”と言える環境になっていたことにうれしくなりました」という答えが。子どもたちだけでなくスタッフにとっても、この村が、“心のふるさと”のような存在なんだろうな。そんな結び付きを感じた瞬間でもありました。

またこの村では、地域とのつながりの中でさまざまなシーンも生まれているようです。草むしりをしていると、近所の方が気さくに声をかけてくれる。建物の中から散歩中の方と目が合えば自然と笑顔

になる。ホールでは、ミニコンサートに地域の方が多く参加したり、学校帰りの子どもたちが友達を連れて来て思う存分体を動かしたり…。そんな風景が覗けるのは、きっとこの村が近隣をつなぐコミュニティとして地域に溶け込んでいるから。固い絆の中で見守られながら、育親と子どもたちは安心して日々の暮らしを紡いでいくのだといいます。

時にやさしく、そして時に厳しく見つめながら、今も、そしてこれからも子どもたちのために力を尽くす2人。子どもたちへの願いを聞くと、こんなことを教えてくれました。「ただの自立じゃなく、“幸せな家庭を築けるような自立”をしてほしいんです。私たちはこれからもそのサポートを頑張るだけです」(文・及川)